

留学を終えて

岡田 梨永子

まずはじめに、最終レポートの提出が大変遅くなってしまったこととお詫び申し上げます。

私がこのフィンドレー大学への留学を決めたのは、「英語ができるようになりたい」という思いが一番にあったからです。そしてそのために、授業を一生懸命頑張ろうと思っていました。

前半はうまくいっていました。リスニング・リーディング・ライティング・スピーキング、どの授業もとても良い成績でした。

しかし後半に入り、Advanceのクラスに進んでからうまくいなくなりました。リーディングのクラスでは自分の調べたいテーマを一つ決め、そのことについての論文を自分で探し、それを読んで要約を書くのが毎回の授業で出されました（毎回の授業で論文3つ分）。まず、自分の調べたいことの答えがわかる論文を探さなければなりません。しかしそれらしいものは見つかっても、果たして本当にそれを読めばわかるのか確信が持てませんでした。でもとりあえず印刷して読もうと試みますが、そもそもリーディングを一番苦手としていた私はなかなか読み進めることができません。また読んで理解したことが本当に合っているのか、読み取れているのかも自信が持てず時間だけが過ぎていき、本当にこの論文を読んでいることが正解なのか、時間を無駄にしているのではないかとひたすら焦りながら、どうしようもできず授業の日を迎えてしまいました。私は小学生からずっと先生に怒られるのが怖くて、宿題を忘れることはほとんどありませんでした。宿題ができなかったというのは自分自身とてもショックでしたが、今回はできなかったのだから正直にごめんなさいと言うしかないと思い授業に出席しました。そして先生に宿題はどうしたのかと聞かれ、“I’m sorry. I couldn’t do my homework.”（ごめんなさい。宿題ができませんでした。）と言いました。すると先生は“Why?”（なぜ?）と聞いてきました。私が、その時最初に心の中で思ったことは、「出来なかったものは出来なかったんだ」というこ

とでした。どうして出来なかったのかと言われても、その時の私は自分自身できちんとできなかった理由を言葉として頭の中で処理できていませんでした。そしてその時の私の中では「私の実力不足でできなかった」というのが一番の理由に感じていました。そして頭の中がごちゃごちゃで何も言えないでいると、先生は、「なぜできなかったの?」「なぜ黙っているの?」などとにかく、Why? Why? Why? の質問せめをしてきました。それでも私が黙って泣いていると、「助けて欲しいことをちゃんとと言わないとわからなじゃないの。」と言ってどこかへ行ってしまいました。その時の私は自分でもどうして欲しいのかを自分自身で明確に認識できていませんでした。ただ涙がポロポロとこぼれ、心の中でひたすら「助けて、助けて」と叫んでいました。でもやっぱり、具体的にどう助けて欲しいのかはわかりませんでした。

日本にいと、学校ではわからなかったことや、辛いこと、困ったことがあって泣いていると先生は優しく「どうしたの?」と聞いてくださり、「こうこうこういう理由で泣いているの?」とか、「これが嫌だったの?」とか、相手の思いを想像して言葉をかけてくださいます。そして、それを聞いて“そうだ”と改めて自分自身の気持ちや理由を認識したりします。本当は自分の中に明確な理由があるのに、それを自分の言葉で明確に説明できず、漠然としたままの感情として持ったままであることが私の場合は多かったように思います。

留学中、大学の近くにある小学校に授業の合間でボランティアとして小学1年生ぐらいのクラスに入らせていただいていた。そこでの、ある算数の時間、(子どもたちは床に座って勉強することが多いのですがその状態で、)先生が一枚の折り紙ぐらいの大きさの黄色い紙を子どもたちに一人一枚配り始めました。そして、その紙を5つに裂くように言いました。子どもたちは、先生の言われた通りに5つに裂きますが、小学1年生ですので綺麗には裂けず、太いものから小さすぎて存在がわからないサイズのものまで色々な大きさになりました。さらには、5つに裂けていない子や、とりあえずたくさん裂いている子など様々でした。そんな状況にも関わらず先生は、その黄色い裂いた紙を5本のバナナと言いながら、2本と3本で5本になるなどの説明を始めました。その状況を見て私はびっくりしました。まず私が先生だったら、床に座った状態で紙を裂いたらその紙がどこかに行ってしまうのではないかと心配になります。そして、もし私が同じように5本のバナナを作って説明するとするなら、画用紙に4本の線を

印刷したものを配り、その線に沿って切らせます。もしくは、そもそも画用紙を切って数を学習するのではなく、ペンやブロックなどすでに1つの個体として存在している道具を使うと思いました。私は全員がついてこられるように、余計なハードル（ここでは、紙を5本に裂く）は排除して授業をしたいと思ってしまいます。しかしその先生は、全員がついてこられているのかを確認する様子はなく、そのまま説明を続けていました。その時ある男の子が先生のところへ行き話しかけました。そして先生はクラスの子ども達に向かって、「〇〇くんは今、私のところへ来てわからないので助けて欲しいと言いました。とても素晴らしいことですね。」と言って拍手をしました。私は衝撃を受けました。その考えは私にとって新しいものでした。そして、確かにきちんと助けを求められることは生きていく上でとても大切だと思いました。

留学中、辛い気持ちを何とかしたいと色々とネットで調べました。その中で、高文脈文化と低文脈文化という言葉を知りました。高文脈文化は曖昧な表現が多く、聞く方は行間を読む必要がある文化です。一方低文脈文化では、聞き手は言葉通りに受け取ればよく、行間を読む必要も感情を読む必要もありません。その代わりに、話す方は明確で具体的に話さなくてはならず、話す方に負担のかかるコミュニケーションとなります。日本はまさしく高文脈文化です。察する力が重要であり、空気を読めなければそのコミュニティで生きづらくなります。確かに、私は相手の気持ちやその場の空気などに常にアンテナを張りながら生きていました。そしてまた、私の周りの人たちも私の気持ちを察して接してくれました。私にとってそんな日本の文化は居心地がよく大好きです。思いやりがある文化だと思います。だからそのままであってほしいと思います。しかし世界に出たとき、必ずしも誰かが察してくれるわけではないのです。自分の気持ちは自分で伝えないといけないのです。察してもらえない環境にいと、自分の気持ちに鈍感になります。だから自分の気持ちを自分の言葉で考える訓練は必要なのかもしれません。

結論から言って、私はそんなにすぐに自分を変えることはできませんでした。あの授業でつまづいて以来、私は毎晩泣き、授業中も泣き、先生を困らせ、「このままではあなたは単位を落とします』というようなメールが届くようになりました（それでも意地で授業は休まず行きました）。その時は、辛くて辛くてた

まりませんでした。それでも時間は過ぎていきました。

そして数年経った今、あの時のことを思い返すとまた涙が出てきてしまうこともあります。それでも、あの時の辛さはもうありません。辛くて辛くてどうしようも無かった時、母が「辛い時は、その辛いことが頭の上を通り過ぎるのをひたすら待てば良いんだよ。」と言ってくれました。本当にその通りで、その時は“辛い”と思うことでも、時間が解決してくれることがあるのだと思いました。

今回の留学は、私にたくさんの経験と知識を与えてくれました。留学をしなければ得られなかったことがたくさんあります。この経験は、私のその後の人生において物事を考えるときにたくさんの視点を与えてくれるものになっています。時々、私は周りとは違う角度で捉えているなと感じることがあります。そしてそれは、私をわくわくさせてくれます。相変わらず自己表現が苦手で、なかなか自分の考えを上手に共有できずもどかしく感じることもありますが、それでも、何か少しでも、私のこの経験が誰かの役に立つようなことに繋がれば良いなと思いい日々を過ごしています。